

---

月 刊

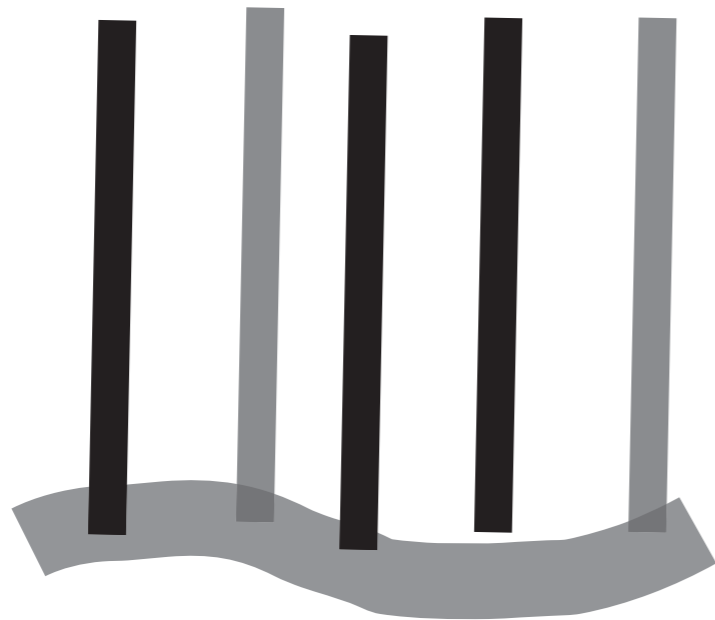
---

# MéLange

---

Vol.142

---



---

2019.04.14

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.142 2019.04.14

「月刊めらんど」編集部

詩

他者 ……………にしもとめぐみ 03  
 多作多捨（俳句） ……………岩脇リーベル豊美 04  
 さくら化身 ……………秦 ひろこ 05  
 平穩 ……………野口裕 06  
 反響音……………富岡和秀 07  
 くぐもり ……………大橋愛由等 08  
 この世の闇で ……………法橋太郎 09  
 嘔吐天国 ……………黒田ナオ 14  
 河の匂い ……………高木敏克 15  
 もう昭和ですよ ……………木澤豊 16  
 落日へ ……………大西隆志 17  
 となりの住民 ……………中嶋康雄 18

コラム

物語とてのカトリック……………大橋愛由等 19

論評

フランツ・カフカ「審判」の攻略方法……………高木敏克 10

連載

神戸詞あしび 131 「洗骨で死者との再会を果たす沖縄の遺習」……………大橋愛由等 16

◆他者

にしもとめぐみ

風も吹かない  
 冷たい空気も入らない部屋  
 はるか遠くを眺める  
 目を凝らしてみる  
 何も見えない  
 耳を澄ましてみる  
 何も聞こえない  
 死んだ子どもの細い素足  
 音になれなかった言葉  
 触れてみて

子犬のまなざし  
 猫のあし  
 小鳥のさえずり  
 ららら ららばい ららばい

光は輝きながら  
 角度をかえてゆく  
 あたり一面に降りそそぐ  
 光も風も計りしれない

さりもない恩寵は  
 わけ隔てなく隅々まで  
 降りそそぎますように

編集部日より★62/1カ月に一作程度映画を観ている。私が映画を選ぶ基準は単純である。神戸・大阪にある単館系映画館で上映されている作品の中から選ぶのである。いわゆるメジャー系の映画会社が配給する作品はほとんどみない（年に一作程度見ることがあるが）。だから新聞などで発表される観客数の多い作品群とは無縁である。こうした傾向は、学生として住んだ京都時代から続いているもので、下宿をしていた左京区百万遍周辺には「日伊会館」「日仏会館」「日独会館」などがあり、それぞれの会館内で独自の映画上映があり、特にイタリアのネオリアリズモ系の作品は大量に見て影響を受けた。また一乗寺には「京一会館」というマイナーな映画を上映する学生好みの映画館があったりして、映画を観る環境には事欠かなかった。そんなわたしが三年前から定期的に映画館に足を運ぶようになったのは、「シルバー料金」の年齢に達したという経済的な理由だった。月曜日の昼間に観ることが多いので、上映五分前にすべりこんでもたいてい席を確保できるのが嬉しい。そして今月（1日）に観たのは「洗骨」（照屋年之監督、2018）。沖縄・粟国島の洗骨儀式にまつわる家族物語である。主役の奥田瑛二がダメ世帯主を好演。その姉役の大島蓉子が絶妙の役回りを演じている。知っているようで実態を知らなかった洗骨の様相が映像化されて興味深く鑑賞できた。私は邦画も観るが、在日や沖縄といったマイノリティーが描き出された作品の方が作品の深度が深いのではないか、と思っている。／今月の「Mélange」例会の第一部読書会は、米田恵子さんによる「山口誓子の俳句世界」について語ってもらうにした。（大橋愛由等記）

◆多作多捨

岩脇リーベル豊美

鳩啼くや城壁 古都の庭 囲む  
南国の花 耳穴に差し踊る老狐  
伊太利語 訳句は渚と陸のテイスト  
分厚いパルミジャーノよ生の瞬間  
内陸人が動物園の猿と聞く海猫  
麦の秋文を書く月 シャンパーニュ  
避暑なる富裕層大音量の魚市場  
古釜やバスマティライスに月南中  
自由精神は形而上学次元に漂流し  
サンゴの朝アスファルトに跳ね返る  
山まるごと 軍事訓練場 燃え立つ  
二十四も 夢語り 季節の激減す  
闇雪に無季俳句ひとつしるすなり  
忘れがたき週末不完全なる冬酒  
心中とヨハンがグラタン焦がすから  
彼氏を喜々語る 彼氏の行動予想不可  
有機栽培ルッコラ 這うマイマイのち  
牛になりし指で反芻しルッコラ  
月無き夜ホロスコープに踏み入る

◆さくら化身

秦 ひろこ

はりつめた冷気のゆるむ はるのはじめ 寒  
さへのこわばりのきえて いのちがほどこけ  
山からただようぬるんだかおり 野のなかで  
生者と死者の ちかづくきせつ 生のうちが  
わの死をおもい 死のうちがわの生をおもい  
さくらの樹々はうなずきあつて 花への心づ  
もりをたしかめあい そのころからだ 身体  
から ときはなたれた死者たちは 年にいち  
どのこの世もうで さくらのなかへ化身する  
つぼみとなつて紅をつのらせ 紅のしだいに  
きわまつて ふうつ…色をやらげ 開花 お  
おかたのはなのひらくまで ほのかにゆるや  
かに 花のいまをふくらませ

(あれだけひろく あればしよで まんかいの  
つらなるふうけいは あれだけたくさんの死  
者たちが 化身したから)

いよいよだよね いよいよだね 風にゆられ  
風にふかれ しろく花びらちらしちらしき  
こえてくる こえなきこえの うたうことば

いのちつくして いきおえて うつろう  
ものは いとおしい ちりゆくものは  
うつくしい ほんに ほんに うつろう  
てこそ ちりゆきてこそ

いのちつくさず いきおえて うつろう  
ものは せつせつない よりあでやかに  
さきひろがり みあげるものらをひきよ  
せて わけわからずに きもちうずかせ

里でも山でも うたをきくと 葉をおとした  
ものたちの 芽ぶきのかいし 芽ぶきに同  
化する死者もいれば あちらにもどるものも  
いて 芽ぶきのいろは あわいさくらをひき  
ついで しろいきなりの ほのかなみどり

およそなつになるまえに 居のこつたもの  
らも かえつていく またくるよ きつとま  
た らいねんくるよ と みずみずひかりに  
まみれながら

## ◆ 平穩

野口裕

道坂は上れ  
階段は下れ  
詩をなさんとすれば  
手段を選べ  
とは言つても徒手空拳  
何をすればよいのか  
通りすがりの人を呼び止め  
抱きつき  
髪をぐじゃぐじゃとやれば  
ぼこぼこにされて  
でも平坦な歩道だから  
何もない  
地球の裏の大嵐が  
ここでは蝶の羽ばたきにすらならない  
鼻毛を抜けば  
四光年先では機関銃が連打されるのに  
すべては待ちの夢の中だ

言訳のため夢へと来た男

## ◆ 反響音

富岡和秀

内宮の声に耳澄ますと、聴こえる筈。静かに流れる深淵の液体の微小音。それは、聴こえるのではない。反響しているのだ。「私」のなかからというよりも、「私の彼方」から反響している。耳から聴こえるのではない。三半規管を超越して反響音が到来する。

その時、何ものかの訪れが反響音とともに到来する。と伴に、生死を超える花群が幻視される。その幻の彼方、空位の域に息するブネウマの微小音。その音が花群を露わにする。見えない眼にはなく、内宮の真のまなこを通して顕現する。

微小音を内宮の孤島に聴くとき、沈黙の声はもたらず。言い難きもの、形なき空位の群青を、沈黙の声はもたらず。

同じときに寸秒夢のような覚醒が訪れる。ひとつの光の覚醒が訪れる。光のメソッドが顕現する。密かに現われる。あ、うん、のような立ち現れ。

峠越えの迷蝶は果てなき抒情を墮とせぬまま

(いつのまにか行方不明になっていた三角が最後にボクの前で回転舞を踊ったのは闇から闇へ小闇が駆け抜けていった新月の翌日であったはずなのだが、大叔母は「あのひとは列車刑に服しているようだから」と眉間に皺を寄せ「もう二度と列車から降りられないだろうし」その刑罰は季節値によって残りの刑期が変動するらしく刑吏はいつも計算尺を持ち歩いていて、列車に幽閉されているとはいえ葡萄牙のダンワインを呑んでいる三角を見かけたとも、単線を走行している時に対向列車がなかなかやってこないため刑吏たちとプラットフォームで回転舞を二晩踊りあかしたとも、レンゲ畑の蜜蜂たちが監獄列車のなかで三角がタルタデサンチャゴを頬張っているのを眺めていたとも。人事異動の都合で列車がしばらく山中で前進できない時、雌鹿たちが視認したのは刑吏たちにむかって三角がなにやら説論したり、自作詩を朗読して刑吏たちからヤンヤの喝采をあげ、時には三角が厨房車両でジビエ料理らしきものを調理していたりする姿。「三角はなにをしでかしたの」と大叔母に問いかけても「曇っていたある日歩いていたらギリシャリクガメに追い抜かされたから」と言ったり「風が川面を通り抜けるときに鳥たちがつぶやいた古謡の意味を知ってしまったので」とか「アバニコを拵げて晨を追い払おうつもりが寄ってきたのは月光販売員だったことに落胆して」など延々の語りについてまで付き合おうかとうんざりしているところに、「そうえば昨日三角から月々の便りが届いた」と大叔母が示した絵葉書には「深き森を往復しているため車中が寒く縦縞のセーター送れ」と記してあったのだが。

## ◆この世の闇で

法橋太郎

花の雨降りしきるなか膝つきてふるへし青き  
こころかもなむ

花冷のする季節にアンナおまえは今日も川を凝視める。新聞をひろげて今日も憤った。どうしてこんな酷いことが起こるのかとアンナおまえは起ちあがつたんだ。そうして社会の不条理を糺すためにおまえはそれを言葉に変えた。おれは言った。自分だけの正義に固執するな。しかしその言葉はますますおまえのこころに火をつける結果になった。

おまえの主人がとつぜん会社を解雇された。おおアンナ、おまえは生活に貧窮した。詩集を出版する金もなくなった。世間のひとがおまえの陰口をして嘲笑う。おまえに同情する

友はいてもおまえを救げだすことは困難だった。過去の栄光がおまえを追い詰める。ひとがおまえを冷やかな目で凝視める。

春が来ても不幸ばかりがおまえを襲う。おまえの姉弟が冤罪で捕まった。アンナおまえは移りゆく時代のなかで闘った。おおくの本を読んでもどうやってこの窮地から抜けだしていいのか分からなくなった。おおくの友がおまえを支援してくれたが結果はでなかった。おおアンナおまえはいま橋の真中に立ち尽くし川の流れてゆくのを眺めていた。

なんども言ったじゃないか、この世ではどんなことが起こっても不思議ではないんだと。向こう見ずなおまえのことをおれはいまでも思い出す。もうおまえはこの世にいない。不慮の事故でおまえは死んだんだ。時代の不幸な詩人としておおアンナ、きつとおまえは歴史に残るだろう。しかしおまえがそれを知ることはないんだ。今日も川は流れることをやめない。花の雨が降りしきるなかを。



## フランツ・カフカ「審判」の攻略方法

高木敏克

### ① テイトレリ島

カフカを読みはじめると、カフカの小説以外何も読む必要がなくなるような気がする時がある。気が付くとカフカが限りなく自由に書けば書けばよほど読者は不自由な空間に閉じ込められてゆき、その閉塞感が妙に気持ちよく感じるのにはなぜなんだろう。

読書にはいろいろな方法があり、それは読み手の勝手であるが、カフカのような世界を比喻に置き換えながら描写してゆく作品を読み込む場合、ある種の作戦が必要であり、その比喻の元の姿はいつたい何かを考えながら読む方法もあるのではないかとおもう。私にとつて読書は航海であり、航海に航海術があるように読書には読書術があつてもよいはずである。

まず審判の世界は人も建物も町もすべてが法律に置き換えられているような世界であり、置き換えられた世界を元に戻しながら読まない普通の意味解釈では読みづらい。

カフカの小説においては「潔白」という言葉が出てくる。法的に潔白であることが「自由」を保証しているようだが、潔白というものが果たしてあり得るのかということが重要なテーマになっている。この主題がはっきりした形で現れるのが、マックス・ブローットの章分けでは第七章、エ・ピンダーの章分けでは第十章に現れる「画家テイトレリ」の章である。この「審判」という小説はブロックのように短編を積み上げた出来上がる予定の中編小説である。短編ブロックには背骨になる予定のものもあれば、肋骨になる予定の短編もある。小説を書く私が読む限り、背骨になる短編ブロックは「画家テイトレリ」の章である。しかも順番もばらばらに書かれた短編集のような「審判」においては「画家テイトレリ」の章を消化しなければ小説全体の意味が解らない。その他の章はいくら読んでもストーリーは崩れるばかりで迷路にはまるだけである。小説「審判」のテーマは画家テイトレリによつて絵のように浮かび上がるのである。罪と罰、有

何も悪いことをした覚えがないのに、ある朝、自宅アパートで逮捕されたところから、Kの自宅も町全体も裁判所に変貌してゆく。法律がある限り裁判所はもともと何も無いところから大きな罪を引き出してくるのだ。「わたしは完全に潔白です」とは言えるほど法律は簡単な絵ではないのだ。

Kを逮捕しに来た監視人も同様にKの矛盾を指摘する。

「見ろよ、ヴェルム、この人は法律を知らないと思つておきながら、そのくせ自分は無罪だと言つているんだ」ともう一人の監視人フランツは賛同を求める。

この言葉はまた、法律のもう一つの本質を暗示している。

法律は読まれないことによつてこそ、その本質的な機能を発揮する。この話を簡単にたとえて言うと、「保険約款は読まれないことによつてその効力を発揮する」という保険の常識を思い出せば容易に理解できる。

保険会社が儲かるのは契約者が誰も約款を知らないからだ。保険約款をよく読む契約者は保険金ばかり請求するので保険会社は損をするが、保険約款を読まない契約者は事故があつても免責だといわれても仕方がないと思つて保険会社を儲けさせる。暗示されている法律のもう一つの本質からすると、Kは法律を知らないからこそ有罪なのだ。労災保険事務所でも働くカフカは約款を下敷きにして法律を考えている法学系作家だとも言えそう。

法律を知らないから有罪だとするのは審判の古典的な本質機能だといえる。なぜなら、ハムラビ法典から始まる法支配とは自由を罪とみなし、不自由を罰として与えるものだからである。古代人は自由と不自由の間でバランスよく生活するしかない。近代になつても画家テイトレリは逮捕されたKに次のように言い始める。

「どんな種類の釈放を」ご希望か、最初に何うのを忘れていました。三つの可能性があります。すなわち真の無罪、見せかけの無罪、それから引き延ばしです。もちろん真の無罪が一番いいに決まっていますが、わたしにはこの種の解決に持ち込む影響力はまずありません。わたしの考えでは、真の釈放に持ち込む力を持った人物なぞそもそも一人として存在しないのです。……」

いうまでもなく真の無罪とは潔白ということになるが、Kが潔白だと

罪と無罪、自由と不自由、それらの重なり合う永遠のテーマがアラベスク絵画として、テイトレリという画家によつて見事に描かれるのがこの章である。

画家テイトレリは主人公のKに尋ねた。

「あなたは潔白ですか」

「ええ」とKは答えた。

(中略)

「わたしは完全に潔白です」

「そうですか」と画家はいつて頭を垂れ、考え込んでいたようだった。それから突然頭を上げると彼は言った。

「潔白だったら、ことは非常に簡単じゃないですか」それからKの目が曇つた。

法的に自由を保証する言葉こそ「潔白」なのだから、テイトレリとの対話は、

「あなたは自由ですか」という質問に対して、

「わたしは完全に自由です」と答えたことになる。

「完全自由」というものがあるのなら、ことは非常に簡単じゃないですか」といわれてからKは考え始める。

果たして、この世に完全な自由を保証する潔白というものは存在するのだろうか。法律がある限り絶対自由というものはあり得ないし、逆に絶対自由が可能な世界では法律は存在しえないのではないかと？法律があるからこそ、「裁判所の奴らがたわごとばかりにかまけているうちに、最後にはしかし、もともと何にもないところから大きな罪を引き出してくるのだ」とKがいうと画家はその通りだという。このことは何を言っているのか。法律がある限り絶対自由はあり得ない。自由は法律により相対的な自由でしかなく、したがつて「潔白」は空ごとではないかとKは気づき始めるのである。

### ② 二つの可能性

日常生活を非日常の裁判所に置き換える作家の作業により小説「審判」は始まつてゆく。

何も悪いことをした覚えがないのに、ある朝、自宅アパートで逮捕され

いうのなら、それを頼りに生きていけば、あなたもわたしも潔白以外の何の援助もいらぬはずだという。潔白だったらことは簡単に済むが果たして潔白は可能なのか？というテーマにまた戻つてくる。真の無罪が不可能な場合には第二の見せかけの無罪を選ぶこともできる。

「もしあなたがこつちをお望みなら、わたしは全紙一枚の潔白証明書を書きます。そういう証明書の文面は父から伝えられているので、攻撃されることは全くありません……」

この証明書はおそらく運転免許証のように偽の自由を保証するものになるはずで、潔白証明書の維持管理には時間と金もかかりそうな気配がうかがわれる。

第三の引き延ばしを選ぶ場合には訴訟がいつまでも一番低い段階に引き留めることによつて成り立つのである。

この第二第三の方法には有罪判決を防げるといふ長所とともに無罪判決も妨げるといふ欠点がある。

それでは、画家テイトレリの場合にはKと比べてどうなのかという疑問が沸いてくる。沸いてこなかったら眠たい読者だ。ここにもユダヤ人独特のイロニーがユダヤジョークのように現れてくる。自由は包囲されることによつて不自由だというイロニーがユダヤジョークとしても笑えてくる。

テイトレリは法律を読まないことによつて最も法律を知っている人物なのだ。

「法律には、といつてもわたしは読んだことはありませんが……」

法律を読まないというなるかを知ることが最も法律を知ることになる。もし法律を読んでいると森に入つて森を見失うのと同じで、法律がどう動くのかは永遠にわからない。これはユダヤ独特のイロニーかもしれないが、罰を受けなければ罪が分からないというハムラビ法典をクラシック調に皮肉るカフカの落語かもしれない。

### ③ 浮かび上がる叙事詩的現在

翻つて考えてみると、元来の法律とは字の読めない、絵しか描けない人を支配して不自由を与えるためにできたものだ。王権は絶対自由を掲げ、言葉は法律であり、罪と罰で字の読めない民衆を字の読める王権の役人

が奴隷にする。その余韻は国家というものが今でも補完しているのかもしれない。

また、絶体自由の古代国家権力が最も信用していたのは完全奴隷であり市民ではない。古代奴隷民族であったユダヤは最も信用されうる沈黙の民族であったのかもしれない。その余韻とは思いたくないが、ヘブライ語のアルファベットもボキヤブラーも極端に少ない。話を戻すと裁判所が信用できるのは法律や約款を読まない画家のような存在になる。Kが「あなたは裁判所に信用があるのでしょね」と聞く。と画家は「完全にその通り」と答えた。Kの銀行においてもカフカの保険会社においても法律や約款を読まない顧客は最も信用できる顧客だといえる。カフカもよくしゃべる女性よりも愛犬を信用していたことは確かだ。所有できる者こそ最も信用できる相手だとするのが言語でできた法律の城ともいえる裁判所だ。裁判所も銀行も保険会社もどんだん所有して城になってゆく。

「あの少女たちも裁判所の一部なんですよ」とティトレリはKにいう「なにしろすべてのものが裁判所の一部なんですからね」この現象をわかりやすく説明するには、「逮捕」を「保険契約」さらに「審判」はわかりやすくする。今ではすべてのものに保険がかかっているし、すべての建物は同時に銀行ローンで抵当権が設定されている。

そして、訴訟を取引と読み替えると裁判は保険や銀行の金融取引と同じように見えてくる。「訴訟とは一つの大きな取引以外の何物でもなく、(中略)この目的のためにはもちろん罪があるかもしれないなどといった考えをもてあそんだりしないで、できるかぎり、自分自身の利益だけをしっかりと考えていかなければならない」「わたしはいつも言ってるんですよ。業務主任のKさんはほとんど弁護士だつて」

保険と銀行と裁判所はともに流動的で一体化されたかの街の生活を包囲して所有可能にしている。それが都会の風景だ。プラハのベルリンの銀座のそして淀屋橋の風景だ。ティトレリは画家として観察すれば被告人ほどチャミングなものはないという。このことは美しい人ほど何者かに所有されているということではないだろうか。あるいは心も美しい人ほど所有されやすいということかもしれない。御堂筋を歩いている人はだれもが何時所有されたもおかしくない被告人なのかもしれない。または知らないうちに所有されていますよ逮捕されていますよ。夕方にな

ると公会堂の辺りをきちがいカフカが通り過ぎてゆくかもしれない。そして川辺にたえずみながら語る人がいる。法的な完全潔白が絶対自由につながるかという、自由とは絶えず揺れ動く相対的自由にとどまっているということ、ティトレリは語り始める。

「……………あんなにたくさん事例の中に、潔白の場合がただの一つもなかったなんて、すでに子供のころから、わたしは父が家で訴訟の話やするのやアトリエにきた裁判官から聞かされている……………ただの一度だつて真の無罪判決であったことなんかありませんよ」

今日のような冤罪無罪判決のありえなかつた時代の話として割り引して読むにしても、絶対無実の潔白者がいない限り法は国家に属し、そこに住む限り絶対自由人はあり得ない。人間が生きている限り何らかの不自由を背負っているのは罪を認めている証拠かもしれない。

つまり、どこの国においても自由はそれだけで罪つくりであり、不自由な国罰に包囲されているということではないだろうか。

#### ▼④カフカ「審判」の謎

「どんな種類の釈放をご希望か、最初に何うのを忘れていました。三つの可能性があります。すなわち真の無罪、見せかけの無罪、それから引き延ばしです。もちろん真の無罪が一番いいに決まっていますが、わたしにはこの種の解決に持ち込む影響力はまずありません。わたしの考えでは、真の釈放に持ち込む力を持った人物なぞそもそも一人として存在しないのです……………」

この画家ティトレリからKに投げかけられる問いかけは、小説「審判」の最大の主題であるが、それでは、カフカ自身はどれを選ぼうとしていたのか？

真の無罪、見せかけの無罪、引き延ばしの無罪は、カフカが人生を審判に比喩的に置き換えることによつて書かれた小説であることは誰の目にも明らかだが、法律という比喩のペールを剥がすと出てくるのは人生における「真の自由」「見せかけの自由」「引き延ばしの自由」という選択である。すると「わたしの考えでは真の自由は人生を持ち込む力を持った人物なぞそもそも一人として存在しないのです」ということになる。カフカが「審判」をなぜ書きたかつたのかという謎の答えがここにある。Kがどの道を選んだということはこの小説には書かれていない。書か

#### ▼⑥マックス・ブローットの編集の問題点

ザルモン・ショッケンは1931年にベルリンに書店を始めたが33年にはパレスチナに脱出しなければならなくなつた。ナチス政権下ではユダヤ人作家の出版はユダヤ人出版社からユダヤ人読者のためという厳しい限定付きでかろうじて許されていたが、大保護者とも言うべきショッケンによりベルリンから4巻、プラハから2巻がかろうじて発行された。

1938年に完全に営業が禁止されるまでに「審判」は第三巻として出版されたが、「審判」未完の部分は付録として後につけられた。カフカの親友マックス・ブローとはアメリカ合衆国に亡命することになるが、その時にザルモンと再会できたことがニューヨークに「ショッケン・ブックス Inc」(1945年設立)につながつた。

しかし、マックス・ブローットの手による「審判」の各章配列については最初から問題があつた。ブローットはこの未完の書をあたかも完結したかの如く発行しようとしたため、ブローットはカフカが書いた順番には並んでいなかった。

ブローットが決めた章分けはカフカが書いていつた順序と章分けによる次のような関係になる。

カフカが書いた順序の章

FBIフロライン・ビュルストナー  
マックス・ブローットの編集した章

- (1) 逮捕 第一章
- (2) グルーバツハ夫人との会話／ついでFBのこと #
- (3) 最初の審理 #
- (4) 答刑史 第二章
- (5) 人気のない法廷で／大学生／裁判 第三章
- (6) F Bの女友達 第四章
- (7) 叔父 第六章
- (8) エルザの家に #
- (9) 弁護士／工場主 第七章
- (10) 画家ティトレリ #
- (11) 検事 第八章
- (12) 商人ブロック／弁護士解約 #
- (13) 頭取代理との闘い #
- (14) その建物 第九章
- (15) 大聖堂にて #
- (16) 母のもとへ #
- (17) 終わり 第十章

れていないからこの審判は未完の小説である。それではカフカ自身はどうなんだろう。見せかけの自由も引き延ばしの自由を選択したわけでもない。真の自由を選択したいがその不可能性を書くしかなかつたのかもしれない。

「真の無罪の場合には訴訟書類は廃棄すべきとなつていて、そのときにはそれが訴訟手続きから完全に消えるのです。告訴ばかりか、訴訟も無罪の判決さえも、すべてが廃棄されてしまいます……………」

これを読んで誰もが気になりそうなのが、生前出版した短編集をのぞきそれ以外はすべて、読まずに償却のこと、というカフカの遺言である。カフカは自分の人生を裁判に例えて小説「審判」に投影しているのではない。真の自由は人生を持ち込めなくても、小説なら作品を真の自由を持ち込めるはずである。作品焼却処分遺言の意味が真の無実の場合には訴訟書類は廃棄すべきという小説の意味どうも重なる。「審判」が焼却されなかつたことにより、引き続きカフカの読者は「見せかけの自由」や「引き延ばしの自由」を生き続けなければならないのだろうか？

#### ▼⑤審判における変身

逮捕は朝だつたのに処刑は夜になつた。Kを逮捕しに来た二人の監視人は体にびつたり黒い服を着ていたのに処刑にやつてきた二人はフロツクコートに山高帽だつた。逮捕の時、Kはパジャマを着てベッドにいたのに、処刑の夜Kは黒いスーツで椅子に座つていた。逮捕に当たつては、隣のビュルストナーの部屋が使われたのに、彼女はいなかった。処刑の時には彼女はいて処刑場への案内役になつていた。逮捕の時には向かいの家の窓から老人が隠れるように見ていたが、処刑の時には隣の窓からやせた誰かが身を乗り出して両腕を思いつきり伸ばした。何もかもが入れ替わるのはどういうことか？確かに罪の逮捕と罰の処刑の役者が入れ替わっている。

すると主人公も入れ替わつたのではないかとふと思つてしまう。読み方は絶対自由だから言つてもよいのだろうか、小説家フランツ・カフカと主人公のKは入れ替わつたように見える。確か逮捕にやつてきた二人の男のうちの一人の名前はフランツだつた。もしかしたら、自由と不自由、罪と罰、被告と原告は入れ替わるかもしれない東ヨーロッパ系ユダヤ演劇によくある入れ替わり劇なのかもしれない。



## ◆嘔吐天国

黒田ナオ

ゲロを吐く、ゲロを吐く  
三日三晩のたうちまわって  
ゲロを吐く

蝸なのに烏賊の気持ちなんてわからない

裏の火山が爆発する  
商工会議所も爆破した

そういう面倒くさいことは嫌なんです

庭でミークがゲロを吐く  
ポストも電信柱もゲロを吐く

ノロウイルスだと言っている  
看護師さんが追いかけてくる  
今さらアルコール除菌しても、もう遅い

空気感染は恐ろしい  
どんどん気持ちが悪えてくる

ごめんなきい  
烏賊なのに蝸のふりをしていました

体のあつちこつちにゲロが溜まって  
もう我慢の限界です  
ここで吐いてもいいですか

毒がまわる  
毒がまわる  
早く解毒剤をくれ

百年に一度の恋でした  
ああ、こんなにも好きなのに  
なんだかどこか嘘くさいの

はいはい、全て私が悪うございました  
もう逃げさせてもらいます  
どうせ逃げるしかないんだから

因果応報、勸善懲惡  
祟りが胸のあたりにこびりついて  
まだ吐かずにはられない

こちら、ひとりだけ何もしないで  
寝てばかりいる奴は誰だ

## ◆河の匂い

高木敏克

街角の隅々がオイルで黒ずんで見えるのは港のせい  
かもしれない。道はせまく猫がはしり車の屋根を踏  
んで通り過ぎる若者もいた。そのくせ、中庭がやた  
らと広くそこに車が入りすぎて出れなくなつたのも  
見た。中庭のもう一つの出入口は船着き場になっ  
ていた。

アパートの入口は二つ並んだ左側だがそのドアも狭  
かった。二つのドアが同時に開くことはまずなかつ  
たので気にもせず、この町の入口はどれもこんなも  
のだと思っていたがよく見るとこの入口はもともと  
一つのを二つに分割してできている。おそらく  
部屋も二つに割つたにちがいないと誰もが思ってい  
るにちがいない。ところが、わたしの左のドアの裏  
にはいきなり階段があり意外に広い二階に通じてい  
る。もう一つの右のドアの部屋は一階にとどまっ  
ているはずだが外から見ると画材屋さんしかない。お  
そらく右のドアはこの店の裏口だが今はだれも使っ  
ていないものだと思っていた。

ある日わたしが帰宅してドアを開こうとした時のこ  
とであった。いきなり隣のドアが開いた。おどろい

た女の目がじつとわたしを見ていて離れない。そこ  
まで驚かせてすまないと思つたがあやまる理由はな  
いと思つてドアの奥をのぞいてしまった。

階段が下に続いている。女は長い髪の毛を額からか  
き上げて大きな目で何度か私を見上げた。ストレー  
トにしか話せない外国語で「する？」ときいて「い  
ますぐする？」といいなおした。「ウヒ」ときこえ  
たのでわたしは彼女の首筋にキスをして腰を抱いて  
斜めになつて階段を降りていった。女の匂いが薄闇  
に漂つて沈んでいった。壁がオレンジの電灯に照ら  
されていたがもう一つ水平に差しもむ光があつた。  
体温が河を感じた。わたしを突き放すと女は窓をひ  
らいた。「ずっと見ていたのよ。帰りを待っていた  
わ」と女が言った。自分の匂いが浮くのがわかつ  
た。女はそれを吸いとりうとしていた。「どこから  
見てたの？」と聞くと「ドアの穴からよ。窓からだ  
と河しか見えないわ」と女が笑つた。

どこか似ている男と女の匂いがまじりあつて奇妙な  
ほほえみで二人はかさなつた。隠れた肉の部分が重  
なつてまじりあつた匂いを出すのだからとても優し  
くて少し恐ろしい匂いでもある。女を包みながらそ  
の奥で女に包まれてわたしは抱いたまま立ち上が  
る。窓の外では夕日をうけて河の流れが時間を喰つ  
てゆく。虹彩が開き穴という穴がわたしを沈めよう  
としている。まったく違うはずなのに河にはいつも  
同じ水が流れているように見える。



## ◆もう昭和ですよ

木澤豊

商店街やレストランや  
アパートのたぐさんのドアの前を通り  
風来 渡来  
試してみようじゃないかと風が鳴ると  
地下水道に住む妖精たちが騒ぐ  
ほうほうと帰って睡りたいんだが

名人ウエイターが三本指で真鍮の盆に  
七つのグラスを乗せて  
踊るように通ったレストランの  
その真ん中に階段があつたりさ  
店を通り抜けて降りたりさ  
ここは百十数階とか

火の皮手帳の書き込みが復活する  
すべてこれから であるかのように

## ◆落日へ

大西隆志

歩道橋より眺めたのは先ほどの黄昏ではなく  
七十年前の山峡に沈む光の残像だったようだ  
形と色を変えるものは小枝の葉だけではなく  
どこまでも追い求めていたのは釣果ではない  
鮎の友釣りには縄張り争いの記憶が絡みつく  
雨が烟る山容を眺めながら川を上つてしまふ  
鉄砲担ぐように竿を袋に入れて右肩に添える  
おさえつけられた声にまとわりつく呻吟の痕  
思想とは花のように美しくあれに惹かれては  
さらなる一人二人につづいていくことで次へ  
腕章を巻いた隣りの正義に与する嬉々なる顔  
今頃になつて思い出すのは銃後の暮らし方か  
胸に抱えた病をはらいのけながら調書を書く  
傷だらけの机に雑誌を拡げては指差す先へと  
鈍いひかりが走りだしていたのを見ていたか  
若い者たちの危うさは分からない訳でないが  
シユルレアリスムとは敵の思想の言葉となる  
垢まみれの擬古文も臭いとは思つてはいるが  
叔父は捏造された僕らの詩を解釈していった  
特高警察は葺合署の机の抽斗奥に収められる  
黄ばんだ野線入りの用紙に英語とドイツ語と  
ロシア語は川面のさざ波のように光っていた

毛羽だった織物に斜めに降るコトバのはずが  
冷たいなあ

あゝ 物語から出たい

折角 わたしから 逃げてきたんだから

見下ろせば

よろけるふうに

焼けトタンのバラックが立ち

黒い雨が莫産に降る土間がある

じつさい フウコちゃんがよろけて ね

いったい 何千階 階段を降りたのだろう

たぐさんの小屋や店があつて

古いシャツやズボンが干してあつて

ひどく揺れていた

見下ろせば見渡すかぎりの

廃墟だった

戦争はなかったのだ

僕らの親父も叔父さんも世間に合わせたのか  
鈍い光沢はどこへと消えていったか判らない  
敗戦近しの言の葉は通底音のように響くのだ  
戦地から戻った将兵は家族に葉の色を教えた  
上手く生きのびた終わりの年月は闇のなかで  
自らの光源を見つけることに費やされていく  
天のひとたちと地のひとたちは諍いから帰還  
多くの死者に向かつて断念ではありましたが  
美しい落下線を描きながら原子が衝突する先  
次から次へ蠢ぎだすのは本質を脱臼して至る  
背中越しのどなたの姿なのか分からないのに  
昭和の敗戦後に生まれたアメリカ文化の鬼子  
少しの歳月の断絶を帯びる色彩に戯けるのだ  
あやふやな鏡よりは大木なり岩山に驚くこと  
磁石に呼び寄せられるように虫ピンの語り口  
仕事のライセンスが奪われることにビビって  
暮らし始めにつきまとう縄跳びの軌跡に入れ  
踏切の向こうの珈琲屋のドアの鈴を鳴らそう  
重たいドアを引きながら焙煎機のかたわらを  
なんどとなく行ったり来たりしながら過ごす  
アンパンは外套のポケットのなかで潰れそう  
信号機は列車の接近を知らせてくれないのだ  
夕日に染まる坂道には支給された褐色の服を  
引きずりながら歩く死者や爛れた皮膚の生者  
細切れの風景に雑音として挟み込まれている  
早く闇を招き入れては焔が最初に照らす場所  
手に言葉をなすりつけて浮かび上がるものの  
輪郭を目で追いながら堆積した時間をなぞる

# ◆となりの住民

中嶋康雄

猛暑が続く  
 長いチョコレートを食べている  
 チョコレートは板状で  
 端が垂れ下がっている  
 垂れ下がった先から  
 気体が吹きだしている  
 バタバタとその気体を吸った生き物が死ぬ  
 生き物には  
 昔からいるものと  
 つい最近できたものがある  
 宇宙は退屈している  
 となりの住民が笛を吹く  
 昔は昔  
 学校の窓に投げつけられ  
 ガラス片とともに  
 三階の窓から落下した  
 数箇所欠けていたり  
 罅が入っていたりする

遺跡のふりをする物欲しげな  
 その欠損部分には  
 生き物が巣食っており  
 笛の音に合わせて  
 ぶえるぶえるぶるえ  
 ぶえるぶえるぶるえながら  
 卵を産むと  
 卵も  
 ぶえるぶえるぶるえ  
 殻の罅も  
 ぶえるぶえるぶるえ  
 となりの住民のとなりの住民が  
 「笛の音がうるさい」  
 とどなりこむが  
 ぶえるぶえるぶるえだし  
 ポケットのスマホから  
 数字がぶえるぶえる逃げ出す  
 数字が勝手に最寄りのコンビニで  
 アンパンやおにぎりになるので  
 ペットボトル飲料が無性に欲しくなるが  
 もう数字がない  
 なけなしの信用を使って  
 利息つきペットボトル飲料を飲むと  
 「ありがとう(´▽｀)입니다」  
 と徹夜明けの店長がぶえるぶえる言うので  
 穴が開いた靴下が  
 ぶえるぶえる湿り  
 「お湯をよこせ」  
 ふたをしめると  
 インスタントラーメンに敗北し  
 塩分摂りすぎ  
 苛々したとなりのとなりの住民が店長を殴  
 ると  
 店長は眠い目を擦りながら  
 いつまでもいつまでも  
 生まれたての赤ん坊みたいに  
 ぶえるぶえる泣き  
 ぶえるぶえる泣き  
 警察の事情聴取もはかどらない  
 店長がいつの間にか  
 電脳になり  
 体を脱ぎはじめ  
 警官の目脂を笑いながら  
 脱がれた体が  
 膿を垂らして  
 まだ泣いている  
 夜が明ける

大橋 愛由等

詩人・出版社代表

奮美への旅はいつも新  
 しい出会いが待っている。  
 田端孝之神父。去春春か  
 ら奮美市名瀬吉田町の聖マ  
 リア教会に着任している司  
 祭である。この教会はコン  
 ヴェンツァル・フランシス  
 コ修道会が運営していて、  
 わたしが卒業した川学院  
 (兵庫県西宮市)も経営し  
 ている。わたしは直接、田  
 端神父と師弟関係はないの  
 だが、川学院とその周辺  
 の関係者から神父の人望の  
 厚さを聞き及んでいた。  
 田端神父と語り合ってい  
 るとカトリックやキリス  
 ト教という枠組みを超えた  
 折りの大切さを説いてく  
 れ、その語り口は説得力  
 があり、かつ誠実で、宗教  
 者として得難い人物と会え  
 た至福を感じていた。  
 そしてふと振り返ると、  
 洗礼は受けていないもの  
 の、わたしは幼い頃に遭っ  
 ていたカトリックの影響の  
 大きさを、年齢が重なるこ  
 とに身をもって自覚するの  
 だった。カトリックのキリ  
 スト教とは、圧倒的に蓄積  
 力があるのだ。同時にその  
 された「キリスト教という  
 物語」を察することが求  
 められる。その多くの「物  
 語」は日常の細部にわたっ  
 て浸透していくもので、  
 人々の倫理・行動規範にま  
 で広く影響を与えるものな  
 らのである。  
 しかし、カトリックの学  
 校から離れ読書体験を重ね  
 自意識が芽生えてくるど  
 カトリック的世界と距離を  
 置くようになる。司祭とい  
 う存在が神と信者との間に  
 絶対的に存在し、「まこと  
 にその立ち位置(優位性)  
 が復唱される。わたしは「  
 ロスマンツのよう」に聖書  
 というエブリチャールが媒  
 介するにせよ、神と直截的  
 に向きあう信仰の在りよう  
 になつていた。  
 まだ「エス・キリスト」を  
 分離して捉えようとした。  
 つまひて「エス」をわれわれ  
 同じ悩める青年とらえ、  
 「エス」はかならずしもキ  
 リスト(救済者)という普遍  
 者と同一でなくてよい、  
 切り離して理解してもいい  
 のではないかと考えるよう  
 になつたのである。  
 不思議なもので、「こし  
 たカトリック的な教観が  
 ら離脱しているつもりで  
 も、このカトリックとい  
 う言葉は多様なものを包摂  
 しようとする底知れぬ機軸  
 力があるのだ。同時にその  
 力の向かうところは、かつ  
 て信者たちが弾圧された場  
 所である長崎、津和野、そ  
 して奄美などに対して「カ  
 トリックといふ」物語」を  
 深く刻印し、「物語」を補  
 強しつつける強い意識を示  
 すというところである。  
 (神戸市)

## 物語としてのカトリック

ルイーザ・ツビギ随筆 21

2019.4.11

奮美の日報紙・南海日日新聞に掲載された大橋愛由等のコラム「つむぎ随想」を転載します。



# 神戸詞あしび

131-2019.04.14 大橋愛由等



沖永良部島・知名町にあるフーチャ墓

奄美群島に行くと、フーチャ墓に案内されることがある。「風葬墓」と書けばヤマトの人たちにいくばくかの誤解を与えるので、説明はいつも慎重にしている。まず「風葬」といつても決して屍体を野ざらしにするというような葬法ではない。遺体は木製棺桶に屈葬される。ある程度の年数が経過すると、遺体を取り出して、洗骨をすることによって、再びのお別れとするのである。このため本土のように葬儀のあと火葬場で骨を拾い、葬儀会場に帰ってきて、ついでに初七日をすますといった最近の簡略化された死者とのお別れと異なり、別れの儀式が長く、いくつもの段階を踏むのである。とはいってものへフーチャ墓に埋葬↓数年経って洗骨がかったの葬法のスタンダードであった琉球列島であるが、最近では火葬が主流になっていることも伝えておこう。古いフーチャ墓に残っている髑髏の存在は、死、死者、遺体を隠匿する社会風習の中で生活し、かつ火葬しか知らない本土の人間にとっては驚愕の対象である。そうした髑髏は埋葬する家人にとつて誰のものか分かっているのか、死者といつもモノとして再会することができることを意味する。(髑髏が積み上がった

## 洗骨で死者との再会を果たす沖繩の遺習

いる場所もあり、そうした場合は重なりあった先祖たちの集団を一望することができ、ということになる)。

琉球列島でいまだ洗骨を行っている島がある。栗国島である。沖繩本島の西の海上に位置している。そこ

で行われる洗骨儀式を映画に取り込んだのが照屋年之監督の映画「洗骨」(2018)である。

妻に先立たれた夫(奥田瑛二)が喪失感から立ち直れない。本土(東京と名古屋)で働いている長男と長女が母の葬儀のために島に帰ってくる。長男は妻と子どもと共に帰省していたが、夫婦仲がぎくしゃくしている。

葬儀の四年後、「洗骨」のため長男、長女が帰省してくるが、長男は離婚してしまい、長女は未婚のままに妊娠している。それを父はおろおろと見守るばかり、といったバラバラの家族模様が展開される。そこに登場するのが父の姉(大島蓉子)である。この姉が家族に対してヲナリ神の役割を仕事に演じて、バラバラの一家を家族として奮い立たせている。

やがて始まる洗骨の儀式。名古屋からかけつけた長女を孕ませた男がトリックスターの役割を演じ、シマのありよう、立ち位置などを台詞化して、映画を観るわれわれに語りかけている。棺桶をはずすと、そこに現れたのは白骨化した生々しい母の姿だった。

頭蓋骨にはまだ髪の毛が少し付着していて、まずそれを洗い落とし、取り出した頭蓋骨は父が膝にいだき椅子に座る。その父に姉が背後から傘をかかげ頭蓋骨に陽があたらないようにする。残った身内の者たちによって骨が身体の部位ごとに集められる。その間、姉は歌をうたう。クヤの唄だろう(徳之島のクヤは録音したことがある)。映画は洗骨のあらましを隠すことなく映し出したことを評価したい。

母と再会することで、喪失感から抜け出なかった父や、母と会ったことで覚醒する長男、そして洗骨の場から出産する長女など、それはこの一家のあらたな家族物語がスタートした瞬間だった。そしてわたしは棺桶の中に同時に埋葬されていた泡盛の五合瓶の存在も目ざとく見つけたのだった(埋葬された期間に熟成した焼酎は格別の味であると聞いたことがある)。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.142

神戸

2019年04月14日 通巻142号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600 円(税別)